

宿場町寸話

5. 東海道枚方宿五十六次 (1)

2025年7月12日

堀家 啓男

五十七次ってほんまですか

「まきかたちやいませ」「枚方宿」

大坂夏の陣（1615）のあと「東海道枚方宿」は誕生しました。なぜ「東海道五十三次」に入らなかったのか、それは「関ヶ原の戦い」（1600）の後も豊臣秀頼が大坂に頑張っていたからです。夏の陣で秀頼を滅ぼし、徳川家が勝利をおさめた後、京街道四宿を宿駅に加えて「東海道五十七次」となりました。

1. 枚方宿の誕生

枚方宿誕生の礎は戦国末期、枚方蔵谷（ひらかたくらのたに）につくられた「枚方寺内町」とそこで活躍した商工業者ら町衆の活動の積み重ねです。

戦国末期、蓮如上人が、越前の吉崎御坊を出て、淀川沿岸の水運に恵まれた河内出口にやって来て小さな坊（後の光善寺）をひらきます。上人亡きあと、本願寺の後継者となった長男実如上人は水害の心配のない台地であり、且つ、近くに水運の便のある枚方、蔵谷（くらのたに現在の枚方元町）に拠点を移します。永正11年（1514）、「枚方御坊」が開かれ、「寺内町」が生まれます。その後、蓮如の末子（26番目）実従が住職となり、「順興寺」が開基されます。順興寺寺内は大坂本願寺や近辺の商工業者らに移り住み、枚方寺内として大いに発展します。

しかし、織田信長の本願寺攻めの「枚方陣取り」で枚方寺内は消滅し、町衆たちは淀川の津であった近くの三矢に移り住みます。秀吉の天下となると、秀吉は繁栄する三矢村を組み入れて文禄堤を築きます。文禄5年（1596）には、文禄堤の上に「京街道」が置かれ、京阪間の陸路による交通が盛んになります。三矢村と隣村岡村は淀川の津としてまた陸路京街道の中継地として大きく発展し、宿も増えます。

関ヶ原の戦い（1600）で勝利した徳川家康は幕府の開設に先立ち、江戸から京都まで東海道の宿駅を置きました。大坂では豊臣秀頼が健在でしたので後回しになります。家康が大坂夏の陣で秀頼を滅ぼした（1615）あと、京街道の伏見、淀、枚方、守口の四宿（京街道四宿と通称）を宿駅に加え、東海道とします。淀川舟運とともに陸路京街道が旅客、運輸の幹線となり、この結果、江戸、京都、大坂間を結ぶ水陸路の要衝、宿駅「東海道枚方宿」の誕生となりました。